

ワードプロセッサ―事始

鹿児島大学名誉教授 大工原 恭

最近、私信の手紙でもワードプロセッサ―（以下ワープロと書かせて頂く）で書くのが普通になっているが、以前はワープロなどというものはその概念すらなく、邦文の原稿は原稿用紙に手書き、英文はタイプライターで打つのが通常であった。私が鹿児島大学歯学部へ赴任した1979（昭54）年、教室の機器として最初買ったものの一つにIBMのタイプライターがある。前任校では教室に1台しかない（むろん教授用にはもう1台あったが）タイプライターを譲り合って、時には夜の間に使っていたタイプライターを専用で使えるのが大変嬉しかった。ただ、当然のことながらミスタイプをすると打ち直しは難しく、特に用紙を外してしまった後の訂正はほとんど不可能なので、投稿用の最終原稿を仕上げるのに1週間程かかったこともある。それから何年か経って、IBMから1行だけ記憶出来る（従って、1行以内であれば用紙に打ち出す前に訂正可能）タイプライターが発売され、さらにその後1-2年の内に記憶容量が数行から1頁までと大きくなったが、お値段も数十万円と高く、私の教室では購入出来るものではなかった。しかし1980年代の中頃、教室の合田榮一助教授（現岡山大学名誉教授）が、NECのパソコンに乗るWordStarなるワープロソフトを見つけてきた。早速購入したいと思ったのだがお値段が高く（OSも含めて50万円以上したと記憶する）、他の教室と共同で買うことを提案したのだがどこも乗ってくれる教室はなく、結局生化学教室だけで買うことになった。最初は半信半疑であったこのワープロを使ってみると、とにかく訂正が簡単でしかも何行でも追加、消去が可能（今では当たり前のことだが、当時は魔法のように思われた）という便利さに改めて驚いた。これが歯学部では最初の英文ワープロである。また、打ち出し用のタイプライターは、ブラザーミシンが開発した安いタイプライターが、IBMのタイプライターに匹敵するきれいな印字が出来ることが分かって、これを導入した。このWordStarはその後1年に1回程の頻度でversion upされたがその都度購入して、結局Macとレーザープリンターのシステムが

確立する20世紀が終わりになる頃まで、英文原稿はこれを使った。

邦文のワープロは1980年代の初め頃から事務の方で少しずつ使われ始めていたが、英単語がword wrapされないため、英単語が混在する科学論文には使えるものではなかった。しかし、これも少しずつ改良されてword wrapが出来るソフトが出来たので、やはりNECのパソコンに乗る邦文ワープロを1980年代の中頃購入した。しかしこの頃の邦文ワープロは全く馬鹿で使い難く、漢字転換するととんでもない漢字や、思わず正しい漢字と思わせるようなものが出て来て、私には使いこなせなかった。しかし、これを使いこなしたのが教室の事務官であった神之門（旧姓大川）浩美さんである。彼女はそれまでキーボードにも触れたことがなかったはずであるが、独学であのややこしい日本語ワープロを使いこなせるようになり、それまで手書き原稿の謄写版刷りだった生化学実習手引き書（約60頁）をワープロのメモリーに入れてくれた。このメモリーは、その後ワープロソフトがversion upされる度に移し替えて、私が定年退官するまで使わせてもらったのである。

